Bulletin of Aichi Univ. of Education, 67-I（Humanities and Social Sciences）, pp. 1 − 9, March, 2018

英米の俗信（7）

小泉 直

外国語教育講座

The Superstitions of Britain and the United States (7)

Naoshi KOIZUMI

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本稿は，英米に古くから伝わる俗信の起源とその内容を明らかにすることを目的とする研究の一部を成すものである。これまで日本で英米の俗信を本格的に紹介した文献は，筆者の知る限り，東浦ほか（1974）の1点だけである。しかし，この文献は扱っている分野が偏っているだけでなく，各分野で取り上げている項目とその内容も限定的で，網羅的とは言い難い。そこで，本研究では，できる限り組織的に英米の俗信を紹介することを目標とする。本研究では，これまでに「日用品」,「身体」,「数字」,「行為・生理現象」,「色」,「天体」,「人生」,「左側・右側と太陽回り，時計回り」,「飲食物」,「曜日」,「動物」,「建造物」に関する俗信について解説してきた。本稿では，新たに「植物」にまつわる俗信を取り上げる。以下の解説では，質・量ともに優れているという理由から，Lasne and Gaultier (1984), Pickering (1995), Radford and Radford (1969), Waring (1978), Zolar (1990) を資料として選び，これらの文献における記述の中から2冊以上に共通する内容（それゆえ，人々によく知られている内容）を精選してまとめたものである。ただし，上記の5つの文献だけでは不十分もしくは不明確と思われる箇所については参考文献に挙げる他の文献も参照して補足している。

1. 植物

1.1 ドングリ（Acorn）

女性はポケットかバッグにドングリを入れておけば年を取らない〔サセックス（イングランド南西部の旧州）〕。（この俗信はドングリがドルイド僧（古代ケルト民族が信仰したドルイド教の僧）により特別な力をもつ神聖な木と考えられていたオークの木から落ちて来るという事実に由来する。）

窓敷居の上にドングリを置いておけば家に稲妻が落ちることはない。（この俗信はトール（雷・戦争・農業などを司る北欧神話の神）が雷雨を避けるためにオークの木の下で雨宿りをしたという古代スカンジナビアの伝説に由来する。）

1.2 トネリコ（Ash）

トネリコは多くの人によってオークの木と同等かそれ以上に重視されている。北欧神話では，男性はオーディン（知識・文化・戦争・死を司る最高神）によりトネリコの木から創造されたと考えられていて，ash という英語名は男性を意味する古代スカンジナビア語の aska に由来する。古代ローマの博物学者プリニウス（西暦23–79）はヘビに対するトネリコの魔術的な力について言及し，ヘビはトネリコの枝の上を這うよりも火によって死滅する方を好むと記している。

一般的に，くる病やヘルニアの子供をトネリコの木の裂け目を通らせると病気が治ると信じられている。（しかし，子供が生きている間に木が枯れると病気が再発して死ぬことになる。）

枝分かれしたトネリコの棒は銅の鉱床が地下のどこにあるのかを教えてくれる。

若い女性は自分の左の靴の中にトネリコの葉をいれておくと出会った最初の男性と結婚することになる。

トネリコの木が実をつけなければ，それは王か世界的に重要な人物が亡くなる前兆である。

子供の爪の最初の切り屑をトネリコの木の下に埋めておけば，その子供は歌が上手になる〔ノーサンバーランド（イングランド北東部の州）西部〕。

トネリコの枝を持ち歩くか帽子にトネリコの葉をつけていれば，ヘビに咬まれることはない〔アメリカ合衆国〕。

1.3 アスペン（Aspen）

アスペンはキリストの十字架を作るために使われたと言われている。それ以来，恐怖に駆られてアスペンの木の大枝が絶えず震えるようになったとされることから，震える木（shiver tree）というあだ名がつけられ

ている。また，この俗信のために，アスペンは身体を震わせる熱病の治療に効果があると見なされ，患者の爪の切り屑をアスペンの木の中に入れて漆喰で塞ぐと熱が再び上がることはないと信じられている。

チェシャー（イングランド北西部の州）では，アスペンがいぼの治療に使われる。最初に1枚のベーコンでいぼを擦り，それからアスペンの木の皮の割れ目に入れる。やがていぼは患者の皮膚から消え，樹皮の節として現れる。

1.4　ボタン状の花をつける植物（Bachelor's Button）

ヤグルマギク（cornflower）に代表されるボタン状の花をつける植物の総称のことで，結婚の成否を占うのに使われた。若い男性が朝早く摘んで24時間ポケットに入れたままにしておき，1日たっても生き生きとしていたならば，最愛の人と結婚できることになる。もし萎れてしまったら，すぐに別の人を探すことになる。

1.5　ゲッケイジュ（Bay）

古代ローマの博物学者プリニウス（西暦23-79）はゲッケイジュの木に稲妻が決して落ちないと考えていた。また，第2代ローマ皇帝のティベリウス（紀元前42-西暦37）は雷雨の時にいつもゲッケイジュの葉で作られた冠を被っていた。

昔，イギリスの葬式では，ゲッケイジュが枯れたと思われた根からでも再生することから，ゲッケイジュの葉が復活の象徴として使われた。また，ゲッケイジュの木は悪魔と嵐から身を守ってくれると考えられていたので，田舎では家の近くによく植えられていた。

ゲッケイジュの葉が木の上で萎れると，それは家族の中に死人が出る前兆である。

夜，ゲッケイジュの葉を枕の下に置いておくと楽しい夢を見る。

ゲッケイジュの葉を火の中に放り投げ，音をたてて燃えたならば幸運が訪れるが，音をたてずに燃えたならば不運に見舞われる。

1.6　（果樹などの）花（Blossom）

果樹の花が季節外れに咲くのは病人や死人が出る前兆である。地域全体で果樹の花が季節外れに咲くと厳しい冬になり，多くの病人や死人が出る。

ウェールズでは，晩春に咲くクリスマスローズ，6月に咲くサクラソウ，12月に咲くサマ―ローズは不運の前兆と見なされている。

1.7　キイチゴ（Bramble）

にきびに苦しんでいる人はキイチゴの茂みの下を手と膝を使って太陽の進む方向に（つまり，東から西へ）3回潜れば治る。ただし，茂みは両側に根の張ったアーチ形のものでなければなない。また，同じ行為が，イングランド西部地方では百日咳やおでき，ウェールズではリューマチにも効能があると考えられている。

1.8　キンポウゲ（Buttercup）

広く流布している遊びに，太陽が出ている時にキンポウゲを摘んで友だちのあごの下に置き，顔に黄色い反射が現れたら，その友だちはバターが好きであると言い立てるものがある。

キンポウゲを入れた袋を首の周りに掛けると精神異常が治る。

1.9　クローバー（Clover）

イブはエデンの園を追放される前に四つ葉のクローバーを盗んだとされる。

西洋では四つ葉のクローバーが最もよく知られたお守りであり，それを見つけた人には（特に，見つけてすぐに他人にあげた人には）幸運がもたらされると信じられている。また，この特別なお守りを見つけた人は，同じ日に恋人に出会うと言われている。さらに，洗礼者ヨハネの祝日（6月24日）の夕方に見つけたら，超自然的な力が授かるとされる。イギリスでは，第二次世界大戦中，男性が四つ葉のクローバーを見つけてボタンの穴に入れておけば徴兵されないと言われていた。

マザーグースには四つ葉のクローバーの葉について次のような歌がある。

One leaf for fame, one leaf for wealth,
One leaf for a faithful lover,
And one leaf to bring glorious health,
All are in a four-leaf clover.

1枚は名声，1枚は富，
1枚は誠実な恋人，1枚は輝く健康をもたらす。
すべてが四つ葉のクローバーの中にある。

五つ葉のクローバーについては吉凶2つの見解があり，裕福になるという説もあれば，不運の前兆であり，すぐに捨てないと見つけた人が病気になるという説もある。

1.10　ラッパズイセン（Daffodil）

春一番のラッパズイセンを見つけたら，それから1年は銀貨よりも金貨を多く手に入れることになる〔ウェールズ〕。

ガチョウの雛が孵る前にラッパズイセンを家の中に持ち込むのは縁起が悪い〔マン島（イングランド北西部と北アイルランドの間にある島）〕。

ラッパズイセンは家の中に1本だけ持ち込んではならない。必ず束で持ち込まなければならない。さもないと不運に見舞われる。

1.11　ヒナギク（Daisy）

ヒナギクはマグダラのマリアの涙から生えたと言われている。別の言い伝えでは，死産の赤ん坊の魂がヒナギクの種をばら撒いて悲しんでいる両親を慰めているとも言われている。

大昔，ヒナギクは花弁が太陽に向けて開いて夕暮れになると閉じるので「神の微笑（the smile of God）」もしくは「昼間の目（day's eye）」と呼ばれていた。

ヒナギクは恋人の愛情の有無を予測する力をもつと考えられている。ヒナギクを1本摘んで正午が告げられたら，太陽の方を向いて「彼（彼女）は私を愛している，愛していない。（He (she) loves me or loves me not.）」と言いながら花弁をむしり取る。むしり取った花弁の数がその答えを教えてくれる。

ヒナギクの花弁が閉じていたら天気が悪くなる。

ヒナギクの根を枕の下に置いておくと将来の恋人の夢を見る。

春一番のヒナギクを見つけたら，その年1年の幸福を保証するために食べてしまわなければならない。もし食べそこなったら踏みつけるべきである。さもないと1年以内に自分の墓に生えてくる。

1.12　タンポポ（Dandelion）

未婚の女性がタンポポを摘み取って綿毛状の頭部に息を吹きかけ，種子をすべて吹き飛ばすのに必要とされる息の数が結婚するまでに待たなければならない年数を表すとされる。同じ方法が子供を何人産むのかを知るのにも使われる。

昔，タンポポは「寝小便たれ（pissabed）」と呼ばれ，タンポポを摘み取ると寝小便をすると言われていた。

タンポポが朝咲かなければ雨になる。タンポポが4月と7月に咲くと夏は暑くて雨が多くなる。

タンポポ茶は肝臓の病気，リューマチ，血液の浄化に効くと言われている。

1.13　ニワトコ（Elder）

キリストがはりつけとなった十字架はニワトコの木から作られたとされる。また，キリストを裏切った後にユダが首を吊った木もニワトコとされる。

ニワトコはモグラやヘビを追い払う力をもつと言われている。魔法の呪文の犠牲となった場合には，ニワトコの棒で自分の服を叩くと，叩くたびに魔女や魔法使いに打撃を与えることができる。

ニワトコの棒で家畜を叩くと，その動物は惨死する。また，ニワトコの棒で男の子を叩くと，その子の成長は止まってしまう。

雌鶏が卵を産まなくなるので，暖炉でニワトコを燃やしてはならない。

ニワトコの木には稲妻が決して落ちない〔リンカンシャー（イングランド中東部の州）〕。

いぼを治したければ，緑のニワトコの棒でいぼを擦って，その棒を堆肥に埋めて腐らせるとよい。

ニワトコを家の中で燃やすと家族の中に死人が出る〔サセックス（イングランド南東部の旧州）〕。

ニワトコの小枝を2本ポケットに入れてウマに乗ると，いらだったり鞍ずれしたりすることなく，ウマを疾走させることができる。

4月の最後の日にニワトコの葉を集めて傷に当てると，傷は化膿することなく治る。

1.14　ニレ（Elm）

ニレはオークに次いで長寿であることから，「正義の木（tree of justice）」と呼ばれている。ニレの木から葉が散るのはウシの間に瘟疫（伝染病の一種）が流行る前兆である。

デヴォンシャー（デヴォン（イングランド南西部の州）の旧称）では，大麦を植えるのに適した時期はニレの葉がハツカネズミの耳ほどの大きさになった時と言われていた。

アメリカ合衆国の民間療法では，床ずれの防止と火傷の治療にニレの樹皮を煎じた飲み物が使われている。

1.15　シダ（Fern）

イギリスではシダが「悪魔のブラシ（Devil's Brushes）」と呼ばれている。また，シダは踏むと混乱して方角がわからなくなってしまうとされる。

シダを家の中に吊るしておくと雷と稲妻から家を守ってくれるが，切ったり焼いたりすると雨になると言われていた。

シダの葉を持ち歩くのは危険であり，マムシを引き寄せ，後をつけられることになる〔ウェールズ〕。

シダの根を斜めに切るとオークの木のイメージが見えてくる。そのイメージが鮮明であればあるほど幸運な機会に恵まれる。〔サリー（イングランド南東部の州）など〕。

シダの胞子には，長い間，治癒力があると信じられてきた。そのため，今日でも木に生えているシダから取った胞子を潰して水に混ぜで飲むと胃痛が治ると言われている。また，シダの入ったマットレスや枕の上で寝ればリューマチやくる病が治るという。

シダの胞子をポケットやハンドバッグの中に入れておけば，恋人が自分への愛を失うことはない。

夏至祭前夜（6月23日）の真夜中にしか実を結ばないシダの胞子を手にした者は自分の姿が見えなくなると広く信じられていた。シェイクスピアの『ヘンリー四世（Henry IV）』（第1部第2章第1場）の中では，盗賊の1人ギャッズヒルが次のような台詞を述べている。

We have the receipt of fern seed.
We walk invisible.

羊歯の種って有り難え護符があるからにゃな，
ぜったい姿は見えねえときてる。[1]
また，夏至祭前夜に手にシダの胞子を持って山に登れば，金の鉱脈を発見するか青みがかった光で輝く大地の宝を見つけることができる。

1.16　モミ（Fir）

モミの木が危害を加えられたり枯れたり稲妻によって燃えたりしたら，それはその家の主人か女主人が死ぬ前兆である。

モミの木の夢は災難の訪れを意味するが，そのような夢はベッドの脚にモミの枝を置いておけば見なくなる。

モミの木やマツの木を1列に植えると家族の中に木の数と同じ数の死人が出る〔アメリカ合衆国〕。

1.17　花（Flower）

季節外れの花を家の中に持ち込むのは縁起が悪い。

夏に咲くはずの花が冬に咲くのは，その家にとって縁起が悪い〔ウェールズ〕。

偶数の数の花は不運をもたらすので他人に贈ってはならない。

白い花は死を意味するので，病人に持って行ってはならない。白い花と赤い花が混じった花束はさらに不吉で，同じ病棟に死人が出る恐れがある。しかし，赤は生命を象徴するので，赤い花だけの花束は縁起がよい。紫色の花は好意，オレンジ色の花は生命力を象徴することから，どちらも贈答に適している。

新月に植えられた花はよく咲く。

ヒマワリを植えると庭全体に幸運がもたらされる。

花の香りがすると感じたら，それは死の前兆である。

1.18　果樹（Fruit Tree）

1つの季節に果樹の花が2度咲くと，その木を所有している家族の1人が年内に死ぬことになる〔サフォーク（イングランド南東部の北海に臨む州）〕。

植える時に，イヌ，ネコ，ウサギなどの動物の死骸が木の根元に埋められていない果樹には実がつかない〔ヨークシャー（イングランド北東部の旧州）〕。

1.19　ハリエニシダ（Gorse）

ハリエニシダの花を家の中に持ち込むと家族の1人が死ぬ。

1.20　草（Grass）

イギリスの田園地帯では，イヌやネコなどの動物が草を食べていると雨になると言われている。

1.21　サンザシ（Hawthorn）

キリストが磔刑の時にかぶっていた「イバラの冠(the crown of thorns)」はサンザシから作られたと考えられていたので，サンザシには超自然的な力があると信じられていた。そのため，サンザシの花は死人が出るので家の中に持ち込んではならないとされる。

ドアと窓につけられたサンザシの枝は魔女の侵入を防いでくれると広く信じられていた。新郎新婦にはよくサンザシの枝が贈られ，新生児の揺りかごのそばに置かれた。

5月祭（5月1日），夏至祭前夜（6月23日），ハロウィーン（10月31日）にサンザシの木の下に座るのは危険である。なぜなら，サンザシの木の周りで過ごす妖精たちに魔法をかけられたり連れ去られたりする恐れがあるからである。同様の理由から，アイルランドでは，サンザシの木を切り倒す前には妖精たちから許可を得る必要があると考えられていた。

5月祭に家の壁と窓にサンザシの大枝をつけておくと，その夏，雌ウシが大量の乳を出してくれる〔アイルランド〕。

1.22　干し草（Hay）

干し草を積んだ車と出会うのは縁起がよい。見ている間に願い事をすれば，その願い事は叶う。しかし，遠ざかって行く車の背後（特に，角を曲がるの）を見るのは縁起が悪い。そのような事が起こる前に目をそらすべきである。

1.23　ハシバミ（Hazel）

ハシバミの葉と小枝で帽子を作って被ると願い事は何でも叶う〔ウェールズ〕。

二又になったハシバミの小枝はよく地中に埋められた宝や水脈を探り当てるのに使われ，「モーセの棒(Moses's rod)」と呼ばれた。

ハロウィーン（10月31日）の真夜中に切り取ったハシバミの小枝をポケットに入れておくと，どんなに酒を飲んでも酩酊することはない。

ハシバミの実は母親の子宮の中にいる赤ん坊のイメージとして捉えられ，多産の象徴と見なされたことから，結婚式で新郎新婦に捧げられた。また，ハシバミの実が豊作の年は結婚すると子沢山になるよい年と考えられた。しかし，ヨーロッパの一部では，売春婦が増える年とも言われていた。

実が2つ入っているハシバミを見つけたら，それは富もしくは双子の予兆である。

1.24　ヒイラギ（Holly）

ある言い伝えによると，ヒイラギは神が創作したゲッケイジュを真似ようとした悪魔によって作られたとされる。別の言い伝えでは，キリストが磔刑に処せ

られた十字架はヒイラギから作られ，その赤い実はもともと黄色であったが，キリストの血によって赤くなったとされる。しかし，通例は縁起のよい植物と考えられていて，葉が常緑で寒い季節でも実をつけることから，永遠の象徴と見なされている。

ヒイラギを踏むと不運に見舞われる。（この俗信の起源は，神聖な鳥であるロビンが冬の間にヒイラギの実を常食とすることに由来する。）

家の中でヒイラギがクリスマスの飾りとして使われていたら，十二夜（十二日節（1月6日）の前夜）に取り外して焼かなければならない。（もし捨ててしまうと，取り外していないものとして不運が続く。）

クリスマスイブより前にヒイラギを家の中に持ち込むと家族の中で喧嘩が起こる〔ウェールズ〕。

子供のくる病やヘルニアを治したければ，ヒイラギの茂みの隙間を潜り抜けるとよい〔サリー（イングランド南東部の州）〕。

ヒイラギの枝が実を大量につけると雪の多い厳しい冬になる。

若い女性はヒイラギの葉を1枚摘んで，「独身，未亡人，修道女」と唱えながら棘の数を数えていくと，最後の棘に該当する言葉で自分の未来を知ることができる。

1.25　ツタ（Ivy）

家の壁に生えたツタは家を魔法や害悪から守ってくれる。ウェールズでは，家の壁に生えていたツタが枯れて落ちたら，その家の所有者は財政的な不運に見舞われ，家が人手に渡ることになると言われていた。

ツタを贈ると友情を壊すことになる。

ツタの木から作られたコップから好きなだけ水を飲めば子供は百日咳が治る〔シュロプシャー（イングランド中西部の州）〕。

男の子がハロウィーン（10月31日）に何も言わずにツタの葉を10枚集めてから1枚を捨て，残りの9枚を自分の枕の下に置くと愛と結婚の夢を見る。

女の子がツタの葉をポケットの中に入れておくと，最初に出会った男性と，たとえその男性がすでに結婚していたとしても，結婚することになる〔オックスフォードシャー（イングランド中南部の州）〕。

スコットランドでは，女の子がツタの葉を胸の中に入れて次の文句を唱えると，自分の配偶者が誰であるのかわかると言われている。

Ivy, ivy, I love you.
In my boson I put you.
The first young man who speaks to me
My future husband he shall be.
ツタよ，ツタ。あなたを愛している。
私の胸にあなたを入れる。
私に最初に話しかけてくる若者が
私の将来の夫となる。

1.26　ボケ（Japonica）

ボケの緑色の実はリンゴと同じくらいの大きさに成長するが，ケント（イングランド南東部の州）では，エデンの園の「禁断の実（forbidden fruit）」であったとされる。それゆえ，その実を摘むと不運を招くと考えられている。しかし，その他の地域では収穫されてジャムやゼリーが作られている。

1.27　エニシダ（Juniper）

エニシダはヘデロ王から逃れてエジプトに向かう途中，幼子のキリストをかくまったと信じられている。そのため，エニシダは災厄と病気を追い払う特別な力をもつとされる。

ウェールズでは，エニシダの木を切り倒すと1年以内に死ぬと言われている。

1.28　葉（Leaf）

秋に落ちてくる葉を手の中で受けとめると冬の間ずっと風邪をひかない。子供たちの間では，聖ミカエル祭（9月29日）とハロウィーン（10月31日）の間に落ちてくる葉を受けとめるという遊びが人気があり，1枚受けとめるたびに翌年幸せな1日が期待できる。

萎れた葉を家の中に持ち込むのは縁起が悪い。緑色の新鮮な葉を家に持ち込んだ後に突然萎れるのは特に縁起が悪い。ウェールズでは，教会で赤ん坊が洗礼を受けた場所に枯葉があると，その子供が早死にすると言われている。

秋になる前に多くの木が大量に葉を落とすと厳しい冬になる。それがニレの木や果樹であればウシの病気が発生する。

葉が突然葉ずれの音を立てたり上向きになったりしたら，それは雨が近い印である。

マザーグースにはトネリコとオークについて次のような歌がある。

If the oak is out before the ash,
Then we'll only have a splash;
If the ash is out before the oak,
Then we'll surely have a soak.
オークがトネリコより先に芽を出したら，
雨はおしめり程度。
トネリコがオークより先に芽を出したら，
きっと大雨になる。

1.29　ニラネギ（Leek）

自分の身体にニラネギかニンニクを塗りつけた男性はどんな戦いにも勝利し，傷つくことはない〔ウェールズ〕。

1.30　ライラック（Lilac）

ライラック（特に白いライラック）を家に中に持ち込むのは縁起が悪い。

ライラックは病人に贈ってはならない。さもないと病気が再発することになる。

5枚の花弁のライラックを見つけたら縁起がよい。

1.31　ユリ（Lily）

古代から白いユリは無垢と純潔と処女性の象徴であった。そのため，キリスト教では早くからユリが聖母マリアと結びつけられてきた。

男性がユリを踏みつぶすと，その人は自分の妻と娘の純潔を台無しにすることになる。

犯罪で処刑された者の墓の上にユリが生えたら，その者は実際には無実である。

ユリが牛乳の入った花瓶の中に入れられたら，近所の雌ウシはすべて乳が出なくなる。

ユリをゲッケイジュの樹液と混ぜ合わせて堆肥の下に置くと，虫が湧く。その虫をポケットの中に入れられた者は眠れなくなる。また，その虫で擦られた者は熱が出る。

1.32　スズラン（Lily of the Valley）

イギリスとフランスでは，スズランが「聖母マリアの涙（Our Lady's tears）」と呼ばれ，聖母マリアの涙が流れ落ちた場所から最初に芽を出したとされる。別の言い伝えでは，スズランは聖レオナルドが竜と戦っている時に血を流した場所から最初に咲き出したとされる。

花壇にスズランを植えるのは縁起が悪い。そのような事をする者は12か月以内に死ぬことになる〔デヴォンシャー（デヴォン（イングランド南西部の州）の旧称）〕。

1.33　マンドレーク（Mandrake）

マンドレークはその根の奇妙な形が人間に似ていることから，その名がついたとされる。古代では，その根が実際にアルカロイドを含んでいることから鎮痛剤や催眠剤として用いられていた。また，マンドレークは不妊の女性が妊娠するのを助けると考えられ，イギリスでは「愛のリンゴ（love apple）」と呼ばれていた。（この呼称は後にトマトに取って代わられる。）旧約聖書の創世記（第30章第14節）には，ヤコブの妻の1人レアがマンドレークを使ってヤコブの子を身もごることに成功したと記されている。

よく知られた俗信に，

・マンドレークを引き抜く者は死ぬ。

・マンドレークの根は地面から引き抜かれる時に叫び声やうめき声を上げ，その声を聞いた者はすぐに死ぬか気が狂う。

がある。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット（Romeo and Juliet）』（第4幕第3場）の中では，ジュリエットがパリスとの婚礼の前夜に次のような台詞を述べている。

So early waking, what with loathsome smells,
And shrieks like mandrakes torn out of the earth,
That living mortals, hearing them, run mad—
目覚めるのが早すぎて—おぞましい臭いや
聴いた人間は気が狂うという
土から引き抜かれるマンドラゴラの悲鳴や—[2]

1.34　カエデ（Maple）

カエデの枝の間を通り抜けた子供は長生きする。

1.35　マリゴールド（Marigold）

マリゴールドは聖母マリアが胸の上につけていたことからその名がついたとされる。アングロサクソン族（5，6世紀にヨーロッパ大陸からブリテン島に移住したゲルマン民族）はマリゴールドを「農夫の日時計（husband man's dial）」と呼んでいた。そのため，盛んに恋のお守りや結婚式の花輪として使っていた。

イングランド西部地方では，マリゴールドが「大酒飲み（drunkards）」とう別名で呼ばれ，この植物を摘んだり長い間見つめていたりすると飲酒の願望を引き起こすと言われている。

マリゴールドが朝7時までに開かなければ雨か雷雨になる〔ウェールズ〕。

スズメバチやミツバチに刺された時に刺された箇所をマリゴールドの花で擦ると痛みが和らぐ。

1.36　ヤドリギ（Mistletoe）

女性がヤドリギの下に立っていたら，キスしようとする者を拒むことはできない。また，女性が1日にヤドリギの下で7回キスされたら，その女性は年内に結婚することになる。かつては男性が女性にキスをするたびにヤドリギから実を1つ摘み，最後の実が摘まれたら，それ以上はキスをしないという習慣があった。（ヤドリギの下でキスをするという風習は，ヤドリギが愛と結婚の女神フリッグの保護の下に置かれていたという北欧神話の逸話と関係している。）

アメリカ合衆国では，未婚の女性がヤドリギの下に立っていたのにキスされなければ，1年間は結婚することがないと言われている。また，キスを拒否すると，結婚しないで一生を終えることになるとされる。

ヤドリギは十二夜（十二日節（1月6日）の前夜）に焼かないと，クリスマスにヤドリギの下でキスしたカップルは，その年が終わらないうちに喧嘩をすることになる。

イギリスの一部の地域では，これからの12か月間ウシの群れに繁栄がもたらされるように，新年になって

初めて子を産んだ雌ウシにヤドリギの小枝が与えられた。

クリスマス以外の時にヤドリギを切るのは縁起が悪い〔ウスターシャー（イングランド西部の州）〕。また，ヤドリギが寄生している木を切り倒すのは極めて縁起が悪い。

ヤドリギを家の中に置いておくと魔女や悪霊だけでなく雷や稲妻から家が守られる。

昔，ヤドリギは「万能薬（all-heal）」と呼ばれ，ヤドリギから作られた茶はてんかん，心臓病，神経質，歯痛，舞踏病（St. Vitus' dance）に効くと信じられていた。

1.37　ギンバイカ（Myrtle）

イギリスでは一般的にギンバイカが縁起のよい植物と見なされている。伝統的に愛，結婚，多産と関連づけられ，結婚式の花輪で広く使われていた。

ギンバイカは女性が植えないとよく育たず，しかも植える時はスカートを広げて誇らしげな様子をしなければならない〔サマセット（イングランド南西部の州）〕。

ギンバイカが玄関の両側に生えるとその家から愛と平和が絶えることがないが，掘り起こしてしまうと愛と平和も消滅する〔ウェールズ〕。

1.38　イラクサ（Nettle）

イラクサはその一部を持っている者を稲妻から守り，危機のある時には勇気を与えてくれると言われている。

イラクサを掴んで，熱に苦しんでいる病人とその両親の名前を唱えながら根元から引き抜くと，その病人の熱は治まる。

1.39　オーク（Oak）

ヨーロッパでは大昔からオークはその強度，耐久性，長寿のために神聖な木と見なされてきた。また，聖なるヤドリギが寄生する宿主となることからドルイド僧（古代ケルト民族が信仰したドルイド教の僧）や古代スカンジナビア人によって深く崇拝されていた。アイルランドではオークが「7つの崇高な木（seven noble trees）」の1つに数えられ，切り倒した場合には罰金を払わなければならなかった。一般的に，オークに傷つけることへの恐れが大きかったことから，オークを倒すとその叫び声が1マイル離れた所でも聞こえると信じられていた。

オークはかつてトール（雷，戦争，農業などを司る北欧神話の神）に捧げられていたことから稲妻に打たれることはないと考えられていた。そのため，よくオークの枝（やがてドングリに取って代わられる）が稲妻除けとして家の中に置かれていた。

オークの木に打ち込まれた釘は歯痛を治してくれる〔コーンウォール（イングランド南西端の州）〕。

夏至祭（6月24日）にオークの1片で左手の上を黙って擦ると腫れが引く〔ウェールズ〕。

オークの木を抱くとヘルニアが治り，子供ができない夫婦は子宝に恵まれると考えられていた。また，十字路に植えられたオークの木には治癒力があると信じられていた。

タマバチ（gall fly）はよく地面の上のオークの葉に虫こぶ（オーク没食子）を作るが，その中に幼虫を見つけたら富に恵まれ，小さなハエを見つけたら悪い知らせが舞い込み，クモを見つけたらその地域は飢饉に見舞われる。

1.40　パンジー（Pansy）

晴れた日にパンジーを摘むと，じきに雨になる。

1.41　ニチニチソウ（Periwinkle）

墓場からニチニチソウを掘り出すと，そこに埋葬されていた死者が現れ，12か月間悪夢に悩まされることになる〔ウェールズ〕。

1.42　ケシ（Poppy）

ケシは家の中に持ち込むと病気を引き起こすので，縁起が悪い。（これは明らかにケシの麻薬的特性に基づいている。）

ダービーシャー（イングランド中部の州）とノッティンガムシャー（イングランド中北部の州）では，ケシが「耳痛（earache）」と呼ばれ，ケシを摘んだ人の耳の中に集めたケシを入れると激しい痛みを引き起こすと言われていた。ヨークシャー（イングランド北東部の旧州）では，ケシが「盲目狂（blind buff）」と呼ばれ，目の上に置くと目が見えなくなると言われていた。

ケシは虐殺された戦士の血から萌え出たとされることから，第一次世界大戦以来，戦争で亡くなった人たちを追悼するための象徴として使われてきた。戦没者追悼記念日にはケシが退役軍人の資金集めのために売られている。

1.43　サクラソウ（Primrose）

サクラソウが6月に咲くと不運がもたらされる〔ウェールズ〕。

一握りに満たないサクラソウを農場主の家に持ち込むと不運がもたらされ，ニワトリとアヒルの雛が被害を受ける〔ウスターシャー（イングランド西部の州）〕。

サクラソウは悪霊に対する防衛手段として有効とされ，特に不眠の治療薬として使われてきた。

1.44　バラ（Rose）

赤いバラの起源については諸説あるが，ある説によると，ギリシャ神話における愛と美の女神アフロディ

テ（ローマ神話のビーナスに当たる）が美青年アドニスを追い求めた時にバラの木を踏んで血を流し，その血が白いバラを赤く染めたとされる。

バラの花びらを地面に撒くのは凶兆である。（この俗信は古代ローマでバラが死者を災いから守ってくれると信じて墓をバラで飾っていたことに由来する。）

秋にバラとスミレが咲いたら，翌年は伝染病が流行る。

バラは若い女性が恋占いをする手段としても使われる。夏至祭前夜（6月23日）にバラを摘んで白い紙で包み，それをクリスマスまで取っておく。紙を開いた時にまだ新鮮であったら，それをボタンの穴に挿しておく。それを最初に称賛してくれる若い男性が将来の夫となる。また，どんなに愛されているのかを知りたければ指の間で花弁を切るとよい。音が大きければ大きいほど想いは強い。

1.45　ローズマリー（Rosemary）

ローズマリーは追憶の象徴とされ，葬式で死者を忘れないように会葬者によって棺の上に撒かれる。また，結婚披露宴で愛と忠誠の証として新郎新婦のワインの中によくローズマリーの小枝が入れられた。

ローズマリーを身につけていると，記憶力が増大し，手がけるすべての仕事において成功する〔イングランド北部地方〕。

ドアやまぐさ（窓の上部の横木）の上にローズマリーを置いておけば，家から魔女を追い払うことができる。

その他の奇妙な言い伝えに，

・ローズマリーは女房が家長の家にしか生えない〔ハートフォードシャー（イングランド南東部の州）〕。
・ビールの樽の中に潰した少量のローズマリーを入れておくとビールを飲んでも酔わない。
・ローズマリーの木から作られたスプーンは風味のない料理をおいしくしてくれる〔ウェールズ〕。

などがある。

1.46　セージ（Sage）

セージは家と夫をしっかりと監理する女性が植えるとよく育つと信じられている。そのため，庭でセージが繁茂していると，しばしばその家では妻が主導権を握っていると見なされる。

一部の地域では，セージはローマ人によってイギリスに持ち込まれ，ローマ軍が行進しながら落として行ったと信じられている。そのため，道端に自生しているセージはローマ軍が通った痕跡であると考えられている。

5月にセージを食べると長寿が保証されると言われていて，マザーグースには次のような歌がある。

He that would live for aye,
He must eat sage in May.
永遠に生きたいと思う者は，
5月にセージを食べなければならない。

一般的に，セージはその花が不幸をもたらすので，決して花を咲かせてはならないとされる。

若い女性が聖マルコの日（4月25日）の正午に12枚のセージの葉を時計が1回鳴るたびに1枚摘むと，自分の夫となる人に会える〔リンカンシャー（イングランド中東部の州）のホーンキャッスル地域〕。

1.47　海藻（Seaweed）

何世紀もの間，家の玄関に掛けた海藻は，天気がよくなると縮み，雨が近いと膨張して湿っぽくなることから，優れた天気予報と見なされてきた。

乾燥した海藻をマントルピース（暖炉上部の飾り棚）の花瓶の中に入れておくと，家を火事から守ってくれる〔デヴォン（イングランド南西部の州）の漁村〕。

1.48　スノードロップ（Snowdrop）

スノードロップを家の中に持ち込むと，花が再び咲く前に家族の誰かが死ぬことになる。（この俗信はスノードロップの花が病気の流行る冬に咲くことに由来すると考えられている。）

1.49　イバラ（Thorn）

クリスマスイブにヒイラギのイバラを抜いてはならない。つぼみが割れる音を聞いたら呪われることになる〔サマセット（イングランド南西部の州）〕。（この俗信におけるクリスマスイブは旧暦の1月5日を指す。）

イバラの刺し傷を治したければ次のように唱えるとよい〔コーンウォール（イングランド南西端の州）〕。

Christ was of a Virgin born. And He was pricked by a thorn. And it never did bell (fester) or swell. As I trust in Jesus, this one never will.
キリストは聖母マリアより生まれイバラに刺されたが，傷が膿むことも腫れることもなかった。私はキリストを信じているので，この傷もそうならない。

1.50　スミレ（Violet）

スミレは花束にした場合以外は決して家の中に持ち込んではならない。

スミレが季節外れ，特に秋に咲いたら，それはその土地の所有者が亡くなる前兆である。

1.51　クルミの木（Walnut Tree）

天気の悪い日にはクルミの木が魔女たちの開く集会の避難所になるとされる。（これは恐らくクルミの木が稲妻を防いでくれると考えられているからであろう。）また，魔女が座る腰掛けの下にクルミを置いておくと，魔女はその場から動けなくなるという。

クルミの木の下で眠ると夢の中で未来の出来事を見ることができると言われているが，この方法は二度と目覚めることのないという危険を伴う。

1.52　ヤナギ（Willow）

ヤナギは悲しみと失われた愛の象徴と考えられていて，かつては失恋した時にヤナギの花輪を身につけるという習慣があった。

ヤナギの尾状花序（房状に垂れて咲く花穂）を家の中に持ち込むのは悲しみを持ち込むことになるので縁起が悪いとされる。しかし，5月祭（5月1日）に持ち込むのは邪眼[3]から家族を守ってくれるので縁起がよいと言う人もいる。

ヤナギの木はうわさ話をすると考えられているので，その前で秘密を打ち明けるべきではない。さもないと秘密は風に乗ってすぐに広まってしまう。

1.53　セイヨウノコギリソウ（Yarrow）

セイヨウノコギリソウには，「兵士の薬草（soldier's herb）」，「ビーナスの眉毛（Venus's eyebrow）」などの別名があり，傷を治し，生理の止まった女性に再び生理をもたらす力があるとされる。

5月祭（5月1日）の前日にセイヨウノコギリソウの生えている土手に行き，「おはよう，きれいなノコギリソウよ。あなたに3度おはようを言いましょう。明日になる前に，私の本当の恋人が誰なのか教えておくれ」と言いながら9本の小枝を集める。それらを家に持ち帰り，右足のストッキングの中に入れてから枕の下に置くと，夢の中で夫となる人に会える。

結婚式でセイヨウノコギリソウを持っていれば，新郎新婦は少なくとも7年間心から愛し合うことが保証される。

1.54　イチイ（Yew）

常緑樹のイチイは長寿であることから不死の象徴と見なされ，死者の番人としてヨーロッパ中の教会の墓地に植えられている。そのため，イチイを家の中に持ち込むことは縁起が悪いとされる。また，イチイの木を切り倒したり，その枝を切り取ろうとする者は12か月以内に死ぬと言われている。

奇妙な言い伝えに，イチイの下で眠ると目覚めた時に記憶を失っているというものがある。

おわりに

本稿では，英米に伝わる俗信の中から，特に「植物」にまつわるものを取り上げて，その起源と内容を明らかにした。

注

1　『シェイクスピア全集4　史劇Ⅰ』中野好夫訳，筑摩書房より引用。

2　『ロミオとジュリエット』松岡和子訳，ちくま文庫より引用。

3　昔から，悪魔の目すなわち邪眼を持つ人たちがいて，そのような人たちは，じっと見つめるだけで他人の健康や運命を悪化させることができると信じられてきた。特に，色違いの目，くぼんだ目，寄り目，やぶにらみの目を持つ人たちは邪眼の持ち主であるとして告発されてきた。

参考文献

俗信・迷信関連

Donner, C. and J.-L. Caradeau. *The Dictionary of Superstitions*. New York: Henry Holt and Company, 1984.

Lasne, S. and A. P. Gaultier. *A Dictionary of Superstitions*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1984.

Lys, C. de. *A Treasury of Superstitions*. New York: Gramercy Books, 1996.

Pickering, D. *Cassell Dictionary of Supersti- tions*, London: Cassell, 1995.『カッセル英語俗信・迷信事典』青木義孝・中名生登美子訳，大修館書店，1999.

Radford, E. and M. A. Radford. *Encyclopaedia of Superstitions*, Greenwood Press, New York, 1969.

Radford, E. and M. A. Radford. *Encyclopaedia of Superstitions*, Edited and revised by C. Hole, London: Hutchinson, 1975.

Waring, P. *A Dictionary of Omens and Superstitions*, London: Souvenir Press, 1978.

Webster, R. *The Encyclopedia of Superstitions*, Minnesota: Llewellyn Publications, 2008.

Zolar *Encyclopedia of Signs, Omens and Superstitions*, London: Souvenir Press, 1990.

東浦義雄・船戸英夫・成田成寿『英語世界の俗信・迷信』大修館書店，1974.

イギリス文化・ヨーロッパ文化関連

Baring-Gould W. S. and C. Baring-Gould. *The Annotated Mother Goose*, New York: Bramhall House, 1962.

（2017年9月14日受理）